

中国の文献に見られる瑜伽行派と中観派の論争

吉 村 誠

序言

日本の凝然(一二四〇—一三二一)が著した『八宗綱要』卷上には、インド・中国・日本にわたる仏教の歴史と思想が簡便にまとめられている。その冒頭の仏教史の中に、次のような一節がある。

如来滅後一千年間、大乘宗義未分異計。千一百年之後、大乘始起異見。故千一百年、護法清弁、諍空有於依他之上、千二百歲、戒賢智光、論相性於脣舌之間。如金剛与金剛、似巨石与巨石⁽¹⁾。

如来の滅後一千年の間には、大乘の宗義は未だ異計を分たず。千一百年の後に、大乘始めて異見を起こす。故に千一百年に、護法・清弁、空・有を依他の上に諍ひ、千二百歲に、戒賢・智光、相・性を脣舌の間に論ず。金剛と金剛の如く、巨石と巨石とに似たり。

ここには、インドでは仏滅後一千百年後に初めて大乘仏教に見解の相違が起こり、護法と清弁に空・有の論争があり、戒賢と智光に相・性の論争があった、と述べられている。護法・戒賢は瑜伽行派の人物、清弁は中観派の人物として著名であることから、これらは瑜伽行派と中観派の論争について述べているといえる。これらの論争があったことは東アジアの仏教徒の間で広く知られていたが、それが本当に行われたのかどうかについては古くから疑問視され、その真偽については明らかではない⁽²⁾。

小稿は、これらの論争に関する最古の記録である七世紀頃の中国の文献を検討することで、インドでこのような論争が本当に行われたのかどうかを考察するものである。護法と清弁の論争と、戒賢と智光の論争については先学の研究がある⁽³⁾が、こ

ではそこで取り上げられた資料を改めて検証し、また新しい資料の検討を加えることで、少しく新しい知見を述べたいと思う。

一、護法と清弁の論争

1 護法と清弁の空・有の解釈

先ず、護法・清弁の空・有の論争について検討する。護法と清弁の関係を伝える中国最古の資料は、玄奘の『大唐西域記』卷十にある、南インドのダーニヤカタカ国（現在のアマラヴァティー）の記事である。ダーニヤカタカには清弁が弥勒の下生を待つて入定している山があるという内容であるが、その前半は次のようである。

城南不遠有大山巖。婆毘吠伽「唐言清弁」論師、住阿素洛宮、待見慈氏菩薩成仏之处。論師、雅量弘遠至德深邃、外示僧佉之服、内弘龍猛之学。聞摩揭陀国護法菩薩、宣揚法教学徒数千、有懷談議杖錫而往。至波吒釐城、知護法菩薩在菩提樹。論師乃命門人曰。「汝行詣菩提樹護法菩薩所、如我辞曰。『菩薩、宣揚遺教、導誘迷徒。仰徳虚心、為日已久。然以宿願未果、遂乖礼謁。菩提樹者、誓不空見。見当有証、称天人師。』」護法菩薩、謂其使曰。「人世如幻、身命若浮。渴日勤誠、未遑談議。」人信往復、竟不会見。

〔馱那羯磔迦国〕城の南遠からずして大なる山巖有り。婆毘吠伽「唐に清弁と言ふ」論師の、阿素洛宮に住まりて、慈氏菩薩の成仏を見んと待ちし処なり。論師は、雅量弘遠にして至徳深邃、外に僧佉の服を示し、内に龍猛の学を弘む。摩揭陀国の護法菩薩は、法教を宣揚し学徒数千ありと聞き、談議せんと懐ふこと有りて杖錫して往く。波吒釐城に至り、護法菩薩の菩提樹に在るを知る。論師乃ち門人に命じて曰く。「汝行きて菩提樹の護法菩薩の所に詣り、我が辞の如く曰へ。『菩薩は、遺教を宣揚し迷徒を導誘す。徳を仰ぎ心を虚くして、日已に久しと為す。然も宿願未だ果さざるを以て、遂に礼謁に乖く。菩提樹は、誓ひて空しくは見ず。見れば当に証有りて、天人師と称せらるべし』」と。護法菩薩、其の使に謂ひて曰く。「人世は幻の如く、身命は浮べるが如し。日を渴して勤誠し、未だ談議に遑あらず」と。人と信と往復するも、竟に会見せず。

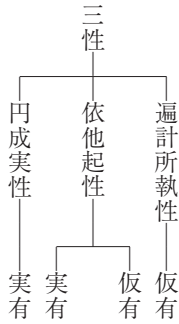
すなわち、清弁は護法と議論をしようとしたが、護法が清弁と会うことを避けたため、両者の対面は実現しなかったという。この記事による限り、護法が清弁と直接対決したことはなかったことになる。しかし、このような話が伝えられているということは、インドで両者の見解に相違があると考えられていた証拠でもある。⁵⁾ここでは、玄奘訳の護法と清弁の著作から両者の空・有に関する考えを確認したい。

先の凝然の記事によれば、護法と清弁は空・有を「依他」の上に諍ったという。そこで、護法の空・有の考えについては、玄奘訳『成唯識論』巻八の三性説に関する一節を見ることにしたい。

此三性中幾假幾実。遍計所執、妄安立故可説為假。無体相故非假非実。依他起性、有実有假。聚集相続分位性故、説為假有。心心所色從縁生故、説為実有。若無実法假法亦無。仮依実因而施設故。円成実性、唯是実有。不依他縁而施設故。⁶⁾

此の三性の中には幾ばくか仮にして幾ばくか実なるや。遍計所執は、妄りて安立するが故に説きて仮と為すべし。体相無きが故には仮に非ず実⁶⁾に非ず。依他起性は、実有り仮有り。聚集と相続と分位との性の故に、説きて仮有と為す。心と心所と色とは縁より生ずるが故に、説きて実有と為す。若し実法無くば假法も亦た無し。仮は実の因に依りて施設するが故に。円成実性は、唯だ是れ実有のみなり。他の縁に依りて施設せざるが故に。

ここでは、三性のうち遍計所執性は仮有（空）、依他起性は仮有と実有（空有）、円成実性は実有であるとされている。これを図示すれば、次のようになるであろう。



依他起性については、仮有と実有の両面が説かれ、後者は前者の因であるとされている。このように依他起性（縁起）の一

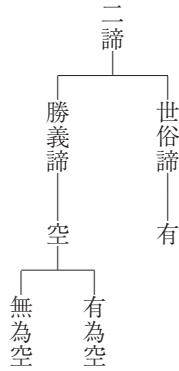
面と円成実性（真如）を実有と見るところに、護法の三性設の特徴がある。これは二諦説から見ると、俗諦を空、真諦を有とする考えであることから、「俗空真有」と言うべきものである。

これに対して、清弁の空有の考えはどうであろうか。玄奘訳『大乘掌珍論』巻上の二諦説に関する一節を見ることにしよう。

「真性有為空。如幻、縁生故。無為無有実。不起、似空華。」…中略…真義自体説名「真性」。即勝義諦。就勝義諦立「有為空」。非就世俗。

「真性において有為は空なり。幻の如し、縁生の故に。無為は実有ること無し。起こらざるがゆゑに、空華に似たり。」…中略…真義自体を説きて「真性」と名づく。即ち勝義諦なり。勝義諦に就きて、「有為は空なり」と立つ。世俗に就くは非ず。

ここでは、二諦説のうち勝義諦は有為も無為も空であり、世俗諦は有であるとされている。これは「俗有真空」と言うべきものである。これを図示すれば、次のようになるであろう。



これをあえて三性説に当てはめるならば、世俗諦の有が遍計所執性、勝義諦の空のうち、有為の空が依他起性、無為の空が円成実性ということになるだろう。

両者の説を比較すると、世俗諦ないし遍計所執性の背後に、勝義諦ないし依他起性・円成実性を見ると、両者の説は似ているとも言えるが、それを有とするか、空とするかという点がまったく逆ということになる。

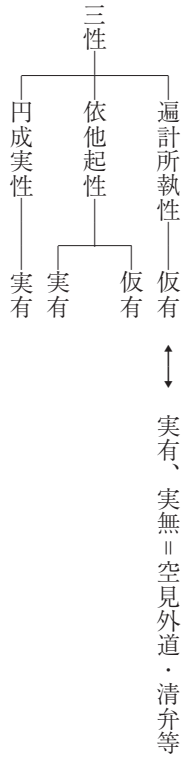
2 中国における護法と清弁の評価

次に、護法と清弁の説が中国でどのように受容されたのかを概観することにした。玄奘の高弟で唯識学派の基（六三二—六八二）は、その著作において護法の三性説が正義であるとし、清弁の二諦説を批判した。基の『弁中辺論述記』巻上の一節を見ることにしたい。

執法有実、種類甚多。執法無実、如空見外道清弁等計。然如所執法即無実、如依他性法即有実。故不可言、彼亦撥無假法性故。依他性中実我則無。

執する法に実有りといふは、種類甚だ多し。執する法に実無しといふは、空見外道・清弁等の計の如し。然も所執の如き法は即ち実無きも、依他性の如き法は即ち実有り。故に、「彼も亦た假法の性を撥無するが故に、依他性の中の実我は則ち無なり」と言ふべからず。

ここでは、遍計所執性については、法が実有であるという執着と、法が実無であるという執着があり、後者は「空見外道・清弁等の計」であるとされている。また、依他起性については『成唯識論』のように仮有と実有の両面が考えられている。円成実性についても『成唯識論』と同様であろう。これを図示すれば、次のようになるであろう。



基は清弁を無に執する者とみなしていた。それは、清弁の二諦説が、依他起性と円成実性の実有を否定することになると考えたからである。基は、清弁を「悪取空者」とみなすことで、護法の解釈が「正義」であることを強調し、唯識学派の権威を

高めようとしたのである。⁽¹⁰⁾

これに対し、華嚴学派の法蔵（六四三—七一二）は、清弁と護法の説にはそれぞれ意味があるとして、両者の相対化を図った。法蔵の『華嚴五教章』巻一には、次のような記述がある。

為末代有情、根機漸鈍聞説依他是有義、不達彼是不異空之有故、即執以為如謂之有也。是故清弁等、破依他有令至於無。至畢竟無、方乃得彼依他之有。若不至此徹底性空、即不得成依他之有。是故為成有故破於有也。

又彼有情、聞説依他畢竟性空、不達彼是不異有之空故、即執以為如謂之空。是故護法等、破彼謂空以存幻有。幻有立故、方乃得彼不異有之空。以若有滅非真空故。是故為成空故破於空也。

以色即是空、清弁義立。空即是色、護法義存。二義鎔融、拳体全損。若無後代論師以二理交徹全体相奪。無由得顯甚深緣起依他性法。是故相破反相成也。

末代の有情、根機漸く鈍なれば、依他は是れ其れ有の義なりと説くを聞きて、彼は是れ空に異ならざるの有なりと達せざるが為の故に、即ち執して以て如謂の有と為すなり。是の故に清弁等は、依他の有を破して無に至らしむ。畢竟無に至りて、方に乃ち彼の依他の有を得るなり。若し此の徹底性空に至らざれば、即ち依他の有を成ずるを得ず。是の故に有を成ぜんが為の故に有を破すなり。

又た彼の有情、依他は畢竟性空なりと説くを聞きて、彼は是れ有に異ならざるの空なりとに達せざるが故に、即ち執して以て如謂の空と為すなり。是の故に護法等、彼の謂空を破して以て幻有を存す。幻有を立つるが故に、方に乃ち彼の有に異ならざるの空を得るなり。若し有滅すれば真空に非ざるを以ての故に。是の故に空を成ぜんが為の故に空を破すなり。色は即ち是れ空なるを以て清弁の義立つ。空は即ち是て色なれば護法の義存す。二義鎔融して拳体全損す。若し後代の論師の二理を以て交徹し全体相奪すること無くば、甚深縁起の依他性法を顕すを得るに由無し。是の故に相破して反て相奪するなり。

すなわち、末代の有情は鈍根であり、空・有が異ならないことが理解できなくなり、依他起性（縁起）が有ると聞いて、言葉どおり有に執着するようになった。そこで清弁等はあえて依他起性は無いとして空を強調した。すると、有情は依他起性が空であると聞いて、言葉どおり空に執着するようになった。そこで護法等はあえて依他起性の有を強調した。これを『般若

『經』で例えるならば、清弁は色即是空、護法は空即是色を説くようなものであり、二義が融和して全体となる。故に両者は相互を破しながら相互を成すものである、という。これを図示すれば、次のようになるであろう。

清弁：破依他有↓至畢竟無↓依他之有

護法：破彼謂空↓存幻有↓不異有之空

相破相成↓二義鎔融、拳体全摂

このように、清弁と護法の解釈は相反するように見えながら、真実には相補関係にあるというのが法蔵の解釈である。ただし、この解釈はたんに両者の調和を述べるものではない。法蔵の目的は、護法と清弁を相対化することで、当時絶頂にあった唯識学派の権威を低めることにあったと考えられる。

なお、太賢の『成唯識論学記』巻上本には、清弁と護法のあいだに本当に論争があったかどうかについて三説があったと伝えている⁽¹²⁾。論争があったとするのが円測、論争はなかったとするのが順憬、論争はあったが両者の意図は同じであったとするのが元暁である。元暁の解釈は法蔵の説に影響した可能性があるだろう。

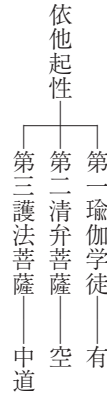
清弁・護法の説に対する解釈は、唯識学派や華嚴学派以外でも行われていた。不空門下の密教僧である良賁^{ろうひ}（七一七―七七七）は、『仁王護国般若波羅蜜多經疏』巻上二で次のように述べている。

泊千年後空有両宗、清弁護法二大菩薩、各依大乘了義之教、明空明有見解不同。依『西域記』此二菩薩、亦不対敵議其優劣。言空有者、所謂遍計所執性・依他起性・円成実性。於三性中、遍計体空両宗共許。円成実性体離名言。次二諦中下具明也。唯就依他論其空有。…中略…第一瑜伽学徒、立依他有。第二清弁菩薩、立依他空。第三護法菩薩、双破二執、建立中道、為『広百論』。聖天造本、護法造積。故為第三評家正義⁽¹³⁾。

千年後に泊^{およ}び空・有の両宗あり、清弁・護法の二大菩薩、各おの大乘の了義教に依り、空を明かし有を明かして見解不同なり。『西域記』に依らば此の二菩薩も、亦た対敵せずして其の優劣を議す。空・有と言ふは、所謂遍計所執性・依他起性・円成実性なり。三性の中に於て、遍計の体の空なるは両宗共に許す。円成実性は体名言を離る。次の二諦の中の下に

具さに明かすなり。唯だ依他に就きて其の空・有を論ず。…中略…第一に瑜伽学徒、依他は有なりと立つ。第二に清弁菩薩、依他は空なりと立つ。第三に護法菩薩、及びに二執を破し、中道を建立し、『広百論』を為る。聖天本を造り、護法積を造る。故に第三を評家の正義と為す。

すなわち、清弁・護法の論争は、依他起性の空・有の解釈をめぐるものである。第一に瑜伽学徒は有、第二に清弁は空、第三に護法は有空中道であるとしたが、第三が「正義」であるという、という。これを図示すれば、次のようになるであろう。



護法を「正義」であるとするところは、唯識学派と同じである。しかし、依他起性について瑜伽学徒が有、護法が有空中道であるとしたという内容は、独自のものである。なお、良賁は『大唐西域記』に基づいて、護法と清弁は直接対論することはなかったが、著作において優劣を議論したとみなしている。

このように、中国では護法・清弁の説について複数の学派で種々の解釈が行われた。その結果、中国ないし東アジアでは護法と清弁の論争が本当に行われたと考えられるようになったのだろう。

二、戒賢と智光の論争

1 戒賢と智光の三時教

次に戒賢・智光の論争について検討する。この論争は、法蔵の著作に地婆訶羅ディバークラ（日照。六一二―六八七）から伝聞した話として述べられている。『華嚴経探玄記』卷一によれば、その経緯は次のようである。

第三述西域説者、真諦三輪、笈多四教、波頗五説、並如別説。又法蔵、於文明元年中、幸遇中天竺三蔵法師地婆訶羅、唐

言日照。於京西太原寺翻譯經論、余親于時乃問。「西域諸德、於一代聖教、頗有分判權實以不。」三藏說云。「近代天竺那爛陀寺、同時有二大德論師。一名戒賢、二称智光。並神解超倫高五印、群邪稽顙異部帰誠。大乘学人仰之如日月、独歩天竺各一人而已。以所承宗別立教不同。」

〔立教差別の〕第三に西域の説を述ぶるとは、真諦の三輪、笈多の四教、波頗の五説、並びに別説の如し。又た法蔵、文明元年（六八四）の中に、幸に中天竺の三蔵法師地婆訶羅、唐に日照と言ふに遇ふ。京の西太原寺に於て經論を翻譯するに、余親しく時に乃ち問ふ。「西域の諸德、一代の聖教に於て、頗る權實を分判すること有りや不や」と。三蔵說云く。「近代天竺那爛陀寺に、同時に二りの大德論師あり。一には戒賢と名け、二には智光と称す。並に神解は倫を超へ声は五印に高く、群邪稽顙し異部帰誠す。大乘の学人之れを仰ぐこと日月の如く、天竺を独歩すること各おの一人のみ。所承の宗別なるを以て立教同じからず。」

これによれば、法蔵は文明元年（六八四）、西太原寺で中天竺の地婆訶羅に会い、西域に聖教の權・實を判別すること、すなわち「教相判釈」があるかどうかを質問した。すると地婆訶羅は、ナーランダ寺に戒賢と智光の二大德がおり、相承した宗旨が別であることから、聖教の判別が異なっていたという。

先ず戒賢の判別は、次のようである。

謂戒賢、即遠承弥勒無著、近踵護法難陀。依『深密』等經、『瑜伽』等論、立三種教。謂仏初鹿園説小乘法。雖説生空、然猶未説法空真理。故非了義。即『四阿含』等經。第二時中、雖依遍計所執自性説諸法空、然猶未説依他円成唯識道理。故亦非了義。即諸部『般若』等教。第三時中、方就大乘正理、具説三性三無性等唯識二諦。方為了義。即『解深密』等經。

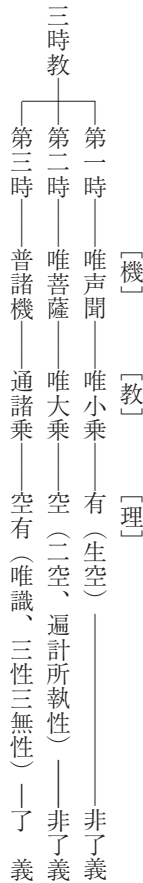
又此三位、各以三義釈。一撰機、二説教、三顯理。且初唯撰声聞、唯説小乘、唯顯生空。二唯撰菩薩、唯説大乘、唯顯二空。三普撰諸機、通説諸乘、具顯空有。是故前二、撰機教理、各互有闕。故非了義。後一、機無不撰、教無不具、理無不円。故為了義。

謂く戒賢は、即ち遠くは弥勒・無著を承け、近くは護法・難陀を踵ぎ、『深密』等の經、『瑜伽』等の論に依りて、三種の教を立つ。謂く仏初め鹿園に小乘法を説く。生空を説くと雖も、然も猶ほ未だ法空の真理を説かず。故に非了義なり。即

ち『四阿含』等の経なり。第二時中に、遍計所執自性に依りて諸法空を説くと雖も、然も猶ほ未だ依他・円成の唯識の道理を説かず。故に亦た非了義なり。即ち諸部の『般若』等の教なり。第三時中に、方に大乘の正理に就きて、具に三性三無性等の唯識の二諦を説く。方に了義と為す。即ち『解深密』等の経なり。

又た此の三位を、各おの三義を以て釈す。一には撰機、二には説教、三には顯理。且く初めは唯だ声聞のみを撰し、唯だ小乗のみを説き、唯だ生空のみを顯す。二には唯だ菩薩のみを撰し、唯だ大乘のみを説き、唯だ二空のみを顯す。三には普く諸機を撰し、通じて諸乗を説き、具さに空有を顯す。是の故に前の二は、撰機・教・理に、各おの互に闕有り。故に非了義なり。後の一は、機として撰せざる無く、教として具せざる無く、理として円ならざる無し。故に了義と為す。

すなわち、戒賢は『解深密経』や『瑜伽師地論』に基づいて三時教を説いた。それは、仏は第一時に唯だ声聞のために小乗の有(生空)の教えを、第二時に唯だ菩薩のために大乘の空(二空、遍計所執性)の教えを、第三時に普く一切のために一切乗の三性三無性(空有)の教えを説いた、というものである。機・教・理について、前二者は欠けているところがあるため非了義、後一者は欠けるところがないため了義である、という。これを図示すれば、次のようになるであろう。



これに対し智光の判別は、次のようである。

第二智光論師、遠承文殊龍樹、近稟提婆清弁、依『般若』等經、『中観』等論、亦立三教。謂仏初鹿園、為諸小根説小乘法、明心境俱有。第二時中、為彼中根説法相大乘、明境空心有唯識道理。以根猶劣、未能令入平等真空。故作是説。於第三時、為上根説無相大乘、弁心境俱空平等一味。為真了義。

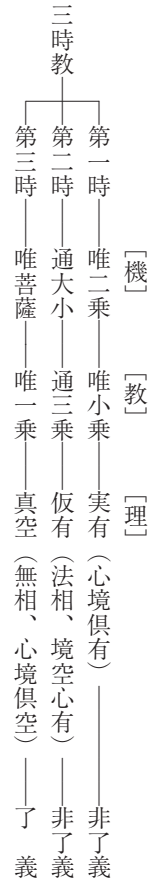
又此三位、亦三義釈。先撰機者、初時唯撰二乘人機。第二通撰大小二機。以此宗計、一分二乘不向仏果。三唯撰菩薩。通

於漸頓、以諸二乘悉向仏果。無異路故。二約教者、初唯説小乘。次通三乘。後唯一乘。三約顯理者、初破外道自性等故、説縁生法定是実有。次即漸破二乘縁生実有之執、説此縁生以為似有。以彼怖畏此真空故、猶存仮有而接引之。後時方就究竟大乘、説此縁生即是性空、平等一味不礙二諦。是故法相大乘有所得等属第二教。非真了義。此三教次第、如智光論師『般若灯論釈』中、具引蘇若那摩訶衍經説。此云『大乘妙智經』。此昔所未聞也。

第二に智光論師、遠くは文殊・龍樹を承け、近くは提婆・清弁を稟け、『般若』等の経、『中観』等の論に依りて、亦た三教を立つ。謂く仏初め鹿園に、諸もろの小根の為に小乗の法を説き、心境俱有なるを明す。第二時中に、彼の中根の為に法相大乘を説き、境空心有なる唯識の道理を明す。根猶ほ劣なるを以て、未だ平等真空に入らしむること能はず。故に是の説を作す。第三時に於て、上根の為に無相大乘を説き、心境俱空の平等一味を弁ず。真の了義と為す。

又た此の三位を、亦た三義もて釈す。先に摂機とは、初時には唯だ二乗人の機のみを撰す。第二には通じて大小二機を撰す。此の宗の計を以て、一分の二乗は仏果に向かはず。三には唯だ菩薩のみを撰す。漸・頓に通ずれば、諸もろの二乗を以て悉く仏果に向かはしむ。異路無きが故に。二には約教とは、初めは唯だ小乗のみを説く。次は三乗に通ず。後は唯だ一乗のみなり。三には顕理に約すとは、初めは外道の自性等を破するが故に、縁生の法は定めて是れ実有なりと説く。次に即ち漸く二乗の縁生実有の執を破せんがために、此の縁生を以て似有と為すと説く。彼れ此の真空を怖畏するを以ての故に、猶ほ仮有を存して之れを接引す。後時に方に究竟大乘に就きて、此の縁生は即ち是れ性空なり、平等一味にして二諦を礙へずと説く。是の故に法相大乘の有所得等は第二教に属す。真の了義に非ず。此の三教の次第は、智光論師の『般若灯論釈』の中に、具さに『蘇若那摩訶衍經』を引きて説く。此に『大乘妙智經』と云ふ。此れ昔に未だ聞かざる所なり。

すなわち、智光も『般若経』や『中論』に基づいて三時教を説いた。それは、第一時に唯だ二乗のために小乗の実有の教え（心境俱有）が説かれ、第二時に大小乗のために三乗に通じる仮有の教え（法相大乘、境空心有）が説かれ、第三時に唯だ菩薩のために一乗の真空の教え（無相大乘、心境俱空）が説かれた、というものである。理について、前二者は縁生の法を実有・仮有とみるため非了義、後二者はそれを真空とみるため了義である、という。これを図示すれば、次のようになるであろう。



智光の三時教は、戒賢の三時教の第二時と第三時を入れ替えて、「理」において空を了義とするものである。また、「機」と「教」において菩薩乘や一仏乗を了義とするところには、『法華経』の影響があると言えるだろう。しかし、智光の三時教の典拠とされる『大乘妙智経』や、それを引用するという智光の『般若灯論积』は、いずれも存在を確認することができない¹⁷。法蔵は後文で両者の三時教を四つの観点から比較している。その内容をまとめれば、次のようである。

	〔戒賢〕	〔智光〕
① 撰機寛狭	寛	狭
② 言教具闕	具	闕
③ 益物大小	小	大
④ 顕理浅深	浅	深

これによれば、戒賢の三時教は①撰機の寛さと②言教の具えに道理があり、智光の三時教は③益物の大きさと④顕理の深さに道理があるという。法蔵は、護法を清弁と相対化したのと同様に、ここでは戒賢を智光と相対化し、唯識学派の権威を低めようとしているのであろう。

華嚴学派の澄観（七三八―八三九）は『華嚴経疏鈔玄談』巻五で、この解釈をさらに発展させている¹⁹。その内容をまとめれば、次のようである。

第一義 戒賢 智光

- ① 撰機寛 (了義) △ ③ 益物大 (了義)
② 言教具 (了義) △ ④ 顯理深 (了義)

第二義

- 「戒賢」 「智光」
① 撰機 総撰三根 (不了義) △ 唯撰大機 (了義)
② 言教 雜説三乘 (不了義) △ 唯説一極 (了義)

すなわち、法蔵の意図は「法性」を明らかにすることであり、その観点からすればここには二義がある。第一に、同じ了義であっても①撰機の寛さよりも③益物の大きさの方が、②言教の具えよりも④顯理の深さの方が重要である。第二に、①②で戒賢の三時教が了義であるとされているが、大機を撰して一極を説く智光の三時教の方が了義である、という。これは「法相」を説く唯識の解釈よりも、「法性」を説く華嚴の解釈の方が全面的に優れているという主張である。戒賢と智光のあいだに相・性の論争があったという説明には、このような華嚴学派の解釈が反映されているのであろう。

2 インドにおける戒賢と智光の関係

戒賢と智光の論争は、法蔵が地婆訶羅から伝聞した話であり、華嚴学派の著作で言及されるが、唯識学派の著作で言及されることはない。また、戒賢の三時教は『解深密経』に典拠があるが、智光の三時教の典拠とされる『大乘妙智経』は存在を認めることができない。さらに、智光の三時教や華嚴学派の著作では、空・有をめぐる「理」の解釈よりも、『法華経』に基づく「機」や「教」の解釈が発展している。その解釈の方法や内容は、中国仏教の特徴である教相判釈の議論そのものである。

これらのことから、智光の三時教が本当にインドで行われていたかどうかについては疑問の余地がある。ここでは、玄奘の

伝記である『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』（以下『慈恩伝』と略称する）から戒賢と智光に関する記事を取り上げ、両者の関係がどのようなものであったのかということを検討することにした。

先ず、『慈恩伝』巻四には、戒賢が智光を戒日王のもとに派遣するという記事がある。その記述は、次のようである。

正法蔵得書集衆量折、乃差海慧・智光・師子光及法師、為四人以応〔戒日〕王之命。其海惠等咸憂。法師謂曰。「小乗諸部三蔵、玄奘在本国、及入迦湿弥羅已来、遍皆学訖、具悉其宗。若欲将其教旨能破大乘義、終無此理。奘雖学浅智微、当之必了。願諸徳不煩憂也。若其有負、自是支那国僧、無関此事。」諸人咸喜。

正法蔵〔戒賢〕書を得て衆を集めて量折し、乃ち海慧と智光と師子光と及び〔玄奘〕法師とを差し、四人と為して以て〔戒日〕王の命に応ぜしむ。其の海惠等咸な憂ふ。法師謂ひて曰く。「小乗諸部の三蔵は、玄奘本国に在りて、及び迦湿弥羅に入りて已来、遍く皆な学び訖り、具に其の宗を悉くす。若し其の教旨を將て能く大乘の義を破さんと欲するも、終に此の理無し。奘は学浅く智微なりと雖も、之れに当りて必ず了ぜん。願はくは諸徳煩憂ざらんことを。若し其の負くること有るも、自らは是れ支那国の僧なれば、此の事に関はる無し」と。諸人咸な喜ぶ。

すなわち、ナーランダの戒賢は、海慧・智光・師子光・玄奘の四人を、戒日王の要請に応じて正量部との論争に派遣することにした。三人はこれを憂慮するが、玄奘は自信を示して彼らを慰めた、という。ここからは、智光はナーランダの大乘を代表する僧であるが、玄奘と同じく、あくまでも戒賢に命じられる立場にあったということが知られる。

次に、『慈恩伝』巻七には、玄奘が帰国後に智光から手紙をもらい、それに返事を出したという記事がある。その記述は次のようである。

夏五月乙卯、中印度国摩訶菩提寺大德智光慧天等、致書於法師。智光、於大小乗及彼外書四章陀五明論等、莫不洞達。即戒賢法師門人之上首、五印度学者咸共宗焉。…中略…

五年春二月、法長辞還、又索報書。法師答并信物。…中略…其詞曰。「大唐国苾芻玄奘、謹修書中印度摩揭陀国三蔵智光法師座前。自*一辞遠俄十余載、境域遐遠音微*莫聞、思恋之情每増延結。…中略…惟正法蔵、…中略…実法門之棟幹也。又如三乗半滿之教、異道断常之書、莫不韞綜胸懷、貫練心府。文繁節而克暢、理隱昧而必彰。故使内外帰依、為印度之宗袖。…後略」

〔永徽三年（六五二）〕夏五月乙卯、中印度国摩訶菩提寺の大德智光・慧天等、書を〔玄奘〕法師に致す。智光は、大小乗と及び彼の外書なる四韋陀・五明論等に於て、洞達せざる莫し。即ち戒賢法師の門人の上首にして、五印度の学者は咸に共に焉れを宗とす。…中略…

〔永徽〕五年（六五四）春二月、法長辞して還らんとするに、又た報書を索む。法師答へて并びに信物す。…中略…其の詞に曰く。「大唐国の苾芻玄奘、謹みて書の中印度摩揭陀国の三藏智光法師の座前に修す。一たび辞違してより俄かに十余載、境域遐かに遠く音微かにして聞こゆる莫く、思恋の情は毎に延結を増す。…中略…惟ふに正法藏は…中略…実に法門の棟幹なり。又た三乘半滿の教、異道断常の書の如き、胸懷に韞綜し、心府を貫練せざる莫し。文は槃節にして而も克く暢び、理は隱味にして而も必ず彰かなり。故に内外をして帰依せしめ、印度の宗袖たり。……後略」

これによれば、マハーボーデー寺の大徳となつた智光が、長安の玄奘に手紙を書いた。智光は、大乘・小乗のみならず外典にも精通した人物で、戒賢の門人の上首であり、インド中の学者から尊崇されているという。また、玄奘が智光にあてた手紙には、ともに師と仰いだ戒賢に対する思慕の情がつつられている。このような記述は、小乗の慧天にあてた手紙には見られない。

以上のことから、戒賢と智光は、戒賢と玄奘のような師弟関係にあつたことが推察される。インドの宗教において師弟関係にありながら論争することは考え難い。このことは、戒賢と智光は「所承の宗別なるを以て立教同じからず」という法藏の伝聞と矛盾する。法藏の伝聞に何らかの誤りがあるか、伝聞が唯識学派を批判するための虚構であるか、どちらかではないかと考えられる。

三、玄奘と師子光の論争

本当に行われたと考えられる瑜伽行派と中観派の論争としては、『慈恩伝』巻四の玄奘と師子光の論争がある。

時戒賢論師、遣法師為衆、講『撰大乘論』『唯識決択論』。時大徳師子光、先為衆講『中』『百』論、述其旨破『瑜伽』義。法師、妙閑『中』『百』、又善『瑜伽』。以為、「聖人立教、各隨一意不相違妨。惑者不能會通、謂為乖反。此乃失在伝人。

中国の文献に見られる瑜伽行派と中観派の論争（吉村）

豈関於法也。」懲其局狭、教往徴詰。復不能酬答。由是学徒漸散、而宗附法師。

法師、又以『中』『百』論旨、唯破遍計所執、不言依他起性及円成実性。師子光、不能善悟、見論称「一切無所得」、謂『瑜伽』所立円成実等亦皆須遣、所以每形於言。法師、為和会二宗、言不相違背、乃著『会宗論』三千頌。論成呈戒賢及大衆、無不称善共宣行。師子光慚赦、遂出往菩提寺。

別命東印度一同学、名旃陀羅僧訶、來相論難、冀解前恥。其人既至、憚威而黙、不敢致言。法師声誉益甚。⁽²²⁾

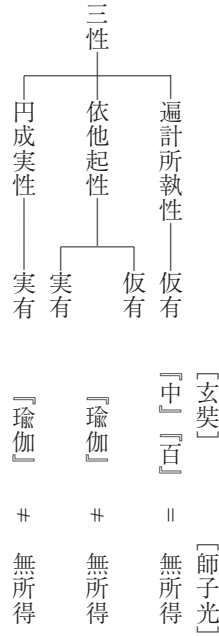
時に戒賢論師、法師をして衆の為に、『撰大乘論』『唯識決択論』を講ぜしむ。時に大徳師子光、先に衆の為に『中』『百』論を講じ、其の旨を述べて『瑜伽』の義を破す。〔玄奘〕法師、『中』『百』を妙閑し、又た『瑜伽』を善くす。以為へらく、「聖人の立教、各おの一意に随ひて相違妨せず。惑者は会通すること能はず、謂ひて乖反と為す。此れ乃ち失は伝人に在り。豈に法に関はらんや」と。其の局狭なるを懲れみ、数しば往きて徴詰するも、復た酬答すること能はず。是れに由りて学徒漸く散じ、法師に宗附す。

法師、又た『中』『百』の論旨を以て、唯だ遍計所執を破すのみにして、依他起性と及び円成実性とを言はずとなす。師子光、善悟すること能はず、〔中』『百』の〕論の「一切無所得なり」と称するを見て、『瑜伽』の立つ所の円成実等も亦た皆な須らく遣るべし、所以は毎に言に形ればなりと謂ふ。法師、為に二宗を和会して、相違背せずと言ひ、乃ち『会宗論』三千頌を著す。論成りて戒賢と及び大衆とに呈するに、善しと称せざる無し。師子光は慚赦して、遂に出でて菩提寺に往く。

〔師子光は〕別に東印度の一の同学、旃陀羅僧訶チャンドラセンハと名づくに命じて、来りて相論難せしめ、前恥を解かんことを冀ふ。其の人既に至るも、〔法師の〕威を憚り黙して敢て言を致さず。法師の声誉益ます甚だし。

すなわち、戒賢が玄奘に『撰大乘論』などを講じさせた時に、師子光は『中論』『百論』を講じ『瑜伽師地論』を破していた。玄奘は「聖人の教えに矛盾はなく、惑者が会通できないだけだ」と考えて問いただすと、師子光はそれに答えることができなかつた。玄奘は『中論』『百論』はただ遍計所執を破すのみであり、依他起性と円成実性については述べていないと考えていた。しかし、師子光はそのことがよく分からず、『中論』『百論』に「一切無所得」とあることから、『瑜伽師地論』の依他起性と円成実性も言葉である以上みな捨てるべきであると考えていた。そこで、玄奘は『中論』『百論』と『瑜伽師地論』

の二つは矛盾しないとして、『会宗論』三千頌を著した。戒賢や大衆はそれを称賛し、師子光は恥じてマハーボーディ寺に移った。師子光は同学に命じて玄奘を論難させようとしたが、それも失敗し、玄奘の名声は益々高まった、という。玄奘と師子光の考えを図示すれば、次のようになるであろう。



すなわち、中観派の師子光は『中論』『百論』に基づいて三性のすべてを空（無所得）であると解釈したが、瑜伽行派の玄奘は遍計所執性を空、依他起性と円成実性を有であると解釈したのである。玄奘がインドで著した『会宗論』は現存しないが、おそらくこのように三性説によって空・有を会通する内容であったと推測される。

おそらく、これが中国の文献に見られる最も確からしい瑜伽行派と中観派の論争の記録であろう。この論争をうけて、基は護法の三性説によって清弁の二諦説を批判し、唯識学派の権威を高めたものと考えられる。また、法蔵は逆に清弁や智光を護法や戒賢と相対化することで、唯識学派の権威を抑えようとしたのであろう。

結語

以上、中国の文献に伝えられる瑜伽行派と中観派の論争について概観した。検証の結果、護法と清弁の空・有の論争と、戒賢と智光の相・性の論争とは、本当に行われたかどうかを確認できないことが知られた。また、それらの論争は、本当に行わ

れたと考えられる玄奘と師子光の論争をうけて、中国の唯識学派や華嚴学派において形成された可能性があることが推察された。

このような瑜伽行派と中観派の論争の伝承は、日本の法相宗と三論宗のあいだで継承された。⁽²³⁾ その結果、凝念の『八宗綱要鈔』卷下には、法相宗と三論宗の相伝が次のように記されるに至った。

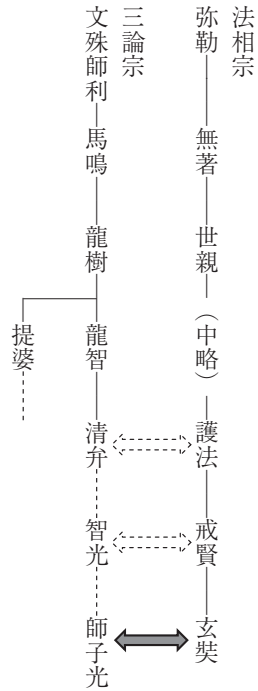
問。此〔法相宗〕教以誰為祖師乎。答。此教三国次第、相承分明。如来滅後九百年時弥勒菩薩、從都率天降中天竺阿瑜遮国、於瑜遮那講堂説五部大論。…中略…次有無著菩薩。…中略…次九百年時有世親菩薩。…中略…次有護法菩薩。…中略…次有戒賢論師。…中略…次大唐初運有玄奘三藏。…中略…

問。此〔三論〕宗以誰為祖師乎。答。祖師血脈、三国相承、師師踵、此宗寔明。初以大聖文殊師利菩薩為高祖、次馬鳴菩薩以為次祖、次龍樹菩薩妙弘此宗、龍樹授龍智菩薩及提婆菩薩。此二大輪師並肩施化。龍智授于清弁菩薩、清弁授智光論師、智光授師子光菩薩。⁽²⁴⁾

問ふ。此の〔法相宗の〕教は誰を以て祖師と為すや。答ふ。此の教は三国の次第、相承分明なり。如来滅後九百年の時、弥勒菩薩、都率天より中天竺阿瑜遮国に降り、瑜遮那講堂に於て五部の大論を説く。…中略…次に無著菩薩有り。…中略…次に九百年の時世親菩薩有り。…中略…次に護法菩薩有り。…中略…次に戒賢論師有り。…中略…次に大唐の初運に玄奘三藏有り。…中略…

問ふ。此の〔三論〕宗は誰を以て祖師と為すや。答ふ。祖師の血脈、三国の相承、師師踵を継ぐこと、此の宗は寔に明かなり。初めに大聖文殊師利菩薩を以て高祖と為し、次に馬鳴菩薩を以て次祖と為し、次に龍樹菩薩は妙に此の宗を弘む。龍樹は龍智菩薩と及び提婆菩薩とに授く。此の二大輪師は肩を並べて化を施す。龍智は清弁菩薩に授け、清弁は智光論師に授け、智光は師子光菩薩に授く。

これを図示すれば、次のようになるであろう。



法相宗の護法—戒賢—玄奘という相承には問題がない。一方、三論宗の清弁—智光—師子光という相承は確認することができる。これは玄奘と師子光の論争を起点として、戒賢と智光の論争、護法と清弁の論争とさかのぼり、法相宗と対になるように作られた系譜ではないかと考えられる。しかし、これまで見てきたように、玄奘と師子光以外の論争があったということは疑わしい。清弁—智光—師子光の系譜は虚構であると言えるだろう。

註

- (1) 凝然『八宗綱要』巻上、大日本仏教全書三、八b—九a。
 「二」、原本は「七」。誤写と見て改める。
- (2) 深浦正文『唯識学研究』上、龍谷大学出版部、一九三三（再録、永田文昌堂、一九五四年。再刊、大法輪閣、二〇一一年）一三八—一七三頁。
- (3) 深浦氏の掲書参照。
- (4) 玄奘・弁機『大唐西域記』巻十、大正五一、九三〇c—九三一b。
- (5) 江島恵教氏は、『中観思想の展開—Bhāṅavivēka 研究—』（春秋社、一九八〇年）二〇三頁で、護法が『大乘広百論釈論』巻十で清弁を論駁していることを指摘している。
- (6) 護法等『成唯識論』巻八、大正三一、四七c。
- (7) 清弁『大乘掌珍論』巻上、大正三〇、二六八c。
- (8) 基『弁中辺論述記』巻下、大正四四、四〇a—b。
- (9) 基の清弁に対する同様の批判は、『成唯識論述記』巻四本、大正四三、三五九a、『唯識二十論述記』巻上、大正四三、九八三b—cにある。

(10) 師茂樹氏は、『論理と歴史―東アジア仏教論理学の形成と展開』（ナカニシヤ出版、二〇一五年）第三章において、中国の唯識学派において清弁が「悪取空者」であるというイメージが形成されたことを指摘している。

(11) 法蔵『華嚴五教章』巻四、大正四五、五〇―a―b。同様の記述に、『十二門論宗致義記』巻上、大正四二、二一八b―cがある。

(12) 太賢『成唯識論学記』巻上本、韓国仏教全書三、四八三b―四八四a。太賢が伝える三説については、師氏の前掲書一四五―一五六頁参照。

(13) 良賁『仁王護国般若波羅蜜多經疏』巻上一、大正三三、四三―a。

(14) 法蔵『華嚴經探玄記』巻一、大正三五、一一―c。

(15) 法蔵『華嚴經探玄記』巻一、大正三五、一一―c―一二―a。

(16) 法蔵『華嚴經探玄記』巻一、大正三五、一一―a。以上と同様の記述に、『大乘起信論義記』巻上、大正四四、二四二a―二四三c、『十二門論宗致義記』巻上、大正四二、二二三a―cがある。

(17) 芳村修基氏は、「大乘妙智經の存否」〔仏教学研究〕五、一九五一年）において、『大乘妙智經』は『智光明莊嚴經』ではないかと推定している。

(18) 法蔵『華嚴經探玄記』巻一、大正三五、一一―a―b。

第四会相違者、問。此二説、既各聖教互為矛盾、未知為可和会、為不可会耶。答。無会、無不会。初無会者：中略：二無不会者、有二門。一約教応機。二約機領教。前中但仏教門、了与不了、有其四位。一約撰機寛狹。二約言教具闕。三約益物大小。四約顯理淺深。①初者若唯撰二乘不兼菩薩、或唯菩薩不兼二乘、各撰機狹故非了義。若寛撰三機周尽、方了義。②二者若唯説小不兼説大、或唯説大乘不兼小乘教、言各有闕故非了義。若言包大小具足三乘、方為了義。『深密經』等擧上二門。戒賢所判亦有道理。③三約益物大小者、若令一切衆生得小乘益、或令一切有情得大乘益、有得小益不能全令得究竟益、俱非了義。若能令彼一切衆生及入寂二乘、悉皆當得大菩提益、方為了義。④四顯理淺深者、若於緣起隨説実有、或雖破実猶存仮有、既会相未尽顯理未極。故非了義。若説縁生即是性空、不礙縁起融通無二、会縁既尽理性円現、方為了義。彼『妙智經』擧上二門。智光所判甚有道理。是故二説、各擧別門、互不相至、豈有相違。

第四に相違を会すとは、問ふ。此の二説、既に各おの聖教なるも互に矛盾と為り、未だ和会すべきと為すや、会すべからずと為すやを知らず。答ふ。会すこと無く、会せざることに無し。初めに会すこと無しとは：中略：二に会せざる無しとは、二門有り。一には教に約して機に應ず。二には機に約して教を領す。前の中に但だ仏教の門に、了と不了

と其の四位有るのみ。一には摂機の寛狭に約す。二には言教の具闕に約す。三には益物の大小に約す。四には顯理の浅深に訊す。①初には若し唯だ二乗を撰するのみにして菩薩を兼ねず、或は唯だ菩薩のみにして二乗を兼ねざれば、各おの摂機狭きが故に非了義なり。若し寛く三機を撰して周尽すれば、方に了義なり。②二には若し唯だ小を説くのみにして大を兼説せず、或は唯だ大乘のみを説きて小乗教を兼ねざれば、言に各おの闕有るが故に非了義なり。若し言大小を包み三乗を具足すれば、方に了義と為す。『深密經』等は上の二門に拠る。戒賢の所判も亦た道理有り。③三に益物の大小に約すとは、若し一切衆生をして小乗の益を得しめ、或は一切有情をして大乘の益を得しむれば、小益を得ること有るも、全くは究竟の益を得しむること能はざれば、俱に非了義なり。若し能く彼の一切衆生と及び入寂二乗をして、悉く皆な当に大菩提の益を得しむれば、方に了義と為す。④四に顯理の浅深とは、若し縁起に於て随ひて実有なりと説き、或は実を破すと雖も猶ほ仮有を存すれば、既に相を会すること未だ尽さず理を顯すこと未だ極まらず。故に非了義なり。若し縁生は即ち是れ性空にして、縁起を礙へず融通無二なりと説かば、縁を会すること既に尽き理性円に現すれば、方に了義と為す。彼の『妙智經』は上の二門に拠る。智光の所判も甚だ道理有り。是の故に

中国の文献に見られる瑜伽行派と中観派の論争(吉村)

二説、各おの別門に拠り、互に相至らざれば、豈に相違有らんや。

(19) 澄観『華嚴經疏鈔玄談』卷五、統藏八、二四一 a—b。

今観堅首之意、多明法性。何者有二義故。一以撰生寛狭、对益物漸次、則撰生寛為了、不及益物唯大為了。以言教具闕、对顯理增微、則言教具為了、不及顯理尽為了。思之可知。二者言中雖云各有二了有二不了、深密宗中二種了義亦成不了。…中略…唯撰大機為了、総撰三根為了。…中略…唯説一極方為了義、雜説三乘即為了不了。

今堅首(法藏)の意を觀るに、多くは法性を明す。何となれば二義有るが故に。一には撰生の寛狭を以て、益物の漸次に対すれば、則ち撰生の寛を了と為すは、益物の唯大を了と為すに及ばず。言教の具闕を以て、顯理の増微に対すれば、則ち言教の具を了と為すは、顯理の尽を了と為すに及ばず。之れを思ひて知るべし。二には言中に各おの二の了有り二の不了有りと云ふと雖も、深密宗の中の二種の了義も亦た不了を成ず。…中略…唯だ大機を撰するを了と為し、総じて三根を撰するを不了と為す。…中略…唯だ一極を説くを方に了義と為し、雑へて三乗を説くを即ち不了と為す。

(20) 慧立・彦棕『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷四、大正五〇、二

四五 a。

中国の文献に見られる瑜伽行派と中観派の論争（吉村）

二二二

- (21) 慧立・彦悰『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷七、大正五〇、二六一 a—c。「自」、原本は「目」。宮本・甲本により改める。「微」、原本は「微」。文義により改める。
- (22) 慧立・彦悰『大唐大慈恩寺三藏法師伝』卷四、大正五〇、二四四 b—c。
- (23) 日本の法相宗と三論宗のあいだで空・有の論争が継承されたことについては、師氏の前掲書第五章参照。
- (24) 凝然『八宗綱要』卷下、大日本仏教全書三、二二 b—二二 a、二九 a—b。

〈キーワード〉護法、清弁、玄奘、唯識、三性